

九州帝國大學工科大学教授  
工學博士 服部鹿次郎先生に呈す

服部先生。

私は遂に雑誌を初めました。

私は白刃を懐にして雑誌を初めました。

× × ×

十數年前私が同一の目論見をして、其案を御目に懸けた時は、私  
に取つて未だ餘りに弱冠でありました。

其後工學が来ました。其後シビルが来ました。

其他建築や電氣通俗科學に關する雑誌類の出版は殆んど數へ切れ  
ない程出来ました。

又工政會が出来、工人俱樂部が出来ました、其他今思ひ出せない  
程の何々會、何々俱樂部も數多く出来ました。而して其總ては私  
の血を沸き立たせるものでありました。

今や私は總べての困難と障碍を排除する丈の體驗を得ました。

百萬人も雖も吾れ往かん。斯くして矢は弦を離れたのであります。

私が血と肉とに依つて得た現場の體驗は、今後種々なる方面に現  
はれる事と思ひます。

× × ×

實に崇嚴なる人生でありました。

今親しみ馴れたあの山や川に別れて、再び操觚生活に入る事は、  
嚴肅なる私の郷土に戻つた感じであります。

× × ×

私は雷管と導火線を扱つた手で又ペンを握る事になりました。

人は必らず趣味に生きねばなりません。總ての技術家が其の仕事  
に興味を感ずる時、工事畫報も其の存在を認めらるゝの時であり  
ます。(岡崎生)